

報告

鹿児島城築城と御楼門

—上山城と鹿児島城の歩みに探る—

三木 靖¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

1. はじめに

鹿児島城御楼門は、2020年4月11日復元完工式の後に開門されました。同門は、明治6・1873年火災で、同城が焼失した際に姿を消してしまっていたが147年振りに再興されました。

鹿児島城は石垣、濠、橋こそ残っていましたが、城内外からみて印象深い、石垣と一体化した建物である御隅櫓、御兵具所、北御門そして御楼門がないのは寂しいと、地元では城を復元したいという声になっていました。1990年大河ドラマ翔ぶが如くのセットで現場に御楼門が登場すると、これが大きなインパクトになり、鹿児島城の復元は御楼門の復元からに絞られ、2010年鶴丸城の城門を復原する会が新照院の国道3号線沿いに「県民の悲願 鶴丸城の城門を復原しよう」という大看板を設置します。そして2013年経済団体等を母体とする、御楼門復元検討委員会の提言があり、鶴丸城御楼門復元実行委員会が寄付金募集を始めます。翌年寄付金当初目標4.5億円をあっという間に達成、2015年には鹿児島県と共に鶴丸城御楼門建設協議会を結成し、2年後に建設工事発注、当初案通り、2020年3月工事が完成します。

鹿児島城復元という県民の期待をもとにした、県民主体の寄付金が、御楼門の復元の機動力となりました。快挙として記憶しましょう。

以下本稿で取り扱うことを整理します。まずは御楼門の復元そのものを扱います。これについては、鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告17に「鹿児島城御楼門の歴史性と復元の経過」（2020年刊）を掲載し、また『（鹿児島歴史の旅講演会）鹿児島城御楼門復元の意味するもの 資料集再編集版』（2020年5月第2版、鹿児島城西ロータリークラブ編、刊）も小冊子にまとめております。そこで詳細はそれに譲り、要約をしていきます。

続いて、鹿児島城の築城についてです。というのは、御



工事中の御楼門（県民交流センターより）



御楼門（城内側より）

楼門は鹿児島城の屋形部の正規の城門で、品格の備わった、鹿児島城のシンボルとっていい門でしたが、鹿児島城の大手門ではありません。当時普通の城では、最高の城門は大手門である、というのが常識でしたが、それに合致しないのです。これは江戸期の城、それは全国で100城を超えましたが、他に類例がありません。この様に鹿児島城にしかない史実は興味を惹きます。その解明に必要なこととなると、どうしても当城の築城期の動きが絡んできます。

そして、その築城期の歴史を、改めて確認するために、



鹿児島城全域図

上山城を含む当城のいくつかのポイントに焦点を当てて取りあげます。これも既に鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 11 に「島津藩の主城としての鹿児島城」(2014 年刊)と鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 15 に「古絵図に見える鹿児島城」(2018 年刊)で扱っています。なお鹿児島城の概念図(「古絵図に見える鹿児島城」32 頁)等で鹿児島城の範囲を示しています。これについては、『鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画』(鶴丸城御楼門建設協議会・鹿児島県, 2016 年刊)でも発表され、その後各方面で取り沙汰されていますが、築城期の考察に資すること大ですが、その範囲に城下の下町を含んだのは再検討が必要です。資料を提供したものとして気にして、2017 年 2 月「鹿児島城の模式図」(鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 15 に「古絵図等に見える鹿児島城」(2018 年刊)に掲載)を描き、2020 年 2 月 29 日鹿児島城全域図を描きました。

なお、鹿児島城の山城を取り扱った『天然記念物及び史跡城山保存活用計画』(鹿児島市, 2020 年刊)等も鹿児島城として城山について本格的な調査結果を提供しています。本稿でもこれらを参考に鹿児島城の歴史を検討します。鹿児島城の歴史は、「鹿児島城の沿革—関係史料の紹介—」(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (26)『鹿児島

(鶴丸)城本丸跡』(鹿児島県教育委員会 1983 年刊)),「鹿児島城二之丸跡について—関係史料の紹介—」(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (55)『鹿児島城二之丸跡(遺構編)』(鹿児島県教育委員会 1991 年刊))等に発掘のデータと共に併載されている五味克夫氏の論稿にいちいち記せませんが、大変お世話になっています。また「鹿児島城跡」,「鹿児島城下」(平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 47, 鹿児島県の地名』(平凡社 1998 年刊) p 137 ~ 143)は内容が充実していて参照されるといいでしょう。

鹿児島城については、その実態、変遷、性格も含め既に報告したものがあります。ランダムにあげれば、『鹿児島の歴史(編共著)』(鹿児島城西ロータリークラブ 1979 年刊),『日本歴史地名大系第 47 巻 鹿児島県の地名(編共著)』(平凡社 1998 年刊), 2010 年 11 月 28 日放送大学公開講座『鹿児島の城で学ぶ』(配布資料), 2018 年 1 月 27 日鹿児島歴史の旅講演会『鹿児島城の内堀』(パワーポイント), 2018 年 8 月 28 日黎明会講演会『国持大名島津氏の鹿児島城』(パワーポイント), 2018 年 10 月 27 日同学舎同窓会講演『鹿児島城御楼門の復元』(パワーポイント), 2019 年 2 月 24 日第 6 回城サミット in かごしま志布志:鹿児島会場記念講演会『江戸城の手本となった鹿児島城!—島津本城はスゴか—』(パワーポイント, 2019 年

7月28日南九州城郭談話会第53回例会講演『鹿兒島城は、鹿兒島の地に伝統を受け継ぎ島津家の総意を結集し誕生』、2020年4月11日『令和2年鹿兒島県立図書館貴重資料紹介展 鹿兒島城再発見・岐阜との絆』（解説冊子）、2020年9月30日～11月3日黎明館企画特別展鹿兒島の城館の図録『鹿兒島の城館』（同館編集で2020年刊）、2020年10月24日黎明館企画特別展「鹿兒島の城館」記念講演会『鹿兒島の城と鹿兒島城』（パワーポイント）等で、いずれも本稿に関連していますので、ご参照いただければと思います。

2 復元御樓門

○復元された御樓門

復元は、写真、礎石等遺物、そして類似の城からの知見をもとに建設されました。場所は、鹿兒島城屋形部本丸の正面の出入口の櫓形の前面で、建物の規模は正面の長さ20m程、高さ20m程、奥行き7m程で、1階が門と門番所、2階が見張等多機能を持つ櫓の、木造2階建ての城門で、総重量336.8tの瀟洒で豪快な建築物です。建物の総重量を18本の柱で受け、この柱が18個の礎石に載ります。木材の全容積は474.407m³で、できる限り県産材を使い、全木材を国産で賄うよう努めて実現しました。木材は周囲の環境と調和して生育する樹木ですから、地元産が最善です。焼失時の御樓門は地元の産出材だったでしょうから、それを念頭に取り組みました。大規模な（大口径）木材は、御樓門建設室が国産で目標を達成しました。鹿兒島城の復元にふさわしい成果です。樹種はケヤキ、ヒノキを主とし、次いでマツ、スギでした。樹種の比率はケヤキ167.67m³（44.6%）、ヒノキ69.50m³（18.5%）、マツ96.56m³（25.8%）、スギ40.40m³（10.8%）、クス0.26m³（0.1%）で、特に1階主柱にはケヤキ材、それも正面中央は礎石に残された帯鉄の錆の精査によって、80cm×70cm、長さ10mの長大径材と指摘（『鹿兒島県建築士会『鹿兒島（鶴丸）城跡『御樓門』復元調査研究報告書』（2012年3月刊））されていたので、ケヤキの長大径角材5本とマツの長大経丸太材5本を最優先で調達し（鹿兒島県木材協同組合連合会『鶴丸城御樓門建設に係る大径木調査等報告書』（2015年8月刊））、予定していた26本の長大径木を期限内に調達し、史料や類似の遺構、現存する城門等を検討し、鹿兒島県建築士会の設計工事監理のもと、江藤・丸久・宇都特定建設工事共同企業体が施行者となり、木工事の施行を受けた亀山建設の代表取締役亀山直央氏以下棟梁・大工らが、伝統技法によっ

て岐阜の工場で忠実に復元しました。

そのため復元された御樓門は堅固重厚で、金属的光沢ある長大径木のケヤキの優品を正面に据え、手加工で生み出された、木目（杓目）が通って独特な紋様が走る澁漣とした感じと、暖かい木材の香りのなか、骨太にして簡素で勇壮な、そして威厳ある重量感とが調和し、周囲の石垣、遺構と一体化した雰囲気醸し出すものとなりました。この復元御樓門は、建物の外容の大きさ、大径材を用いた点で現存木造2階建て城門で最大級ですが、それだけではなく、和風の豊かな武家の歴史を味わう空間を提供しました。この復元された御樓門は、初期に設定された計画通りに作業を達成し、島津氏の本城の魅力を丸ごと味わえる建造物に仕上がりました。じっくりと観賞したいものです。

○御樓門と櫓形

御樓門は鹿兒島城屋形の本丸の櫓形に設置されています。この櫓形とは、聞きなれない言葉と思う方のため説明させていただきます。「さすが」と読み、城や城を構成する曲輪（周囲に防衛施設を伴った、城内の平坦地）、更には城下（城の周囲にある、城と一体化した範囲、城下町と呼ばれる町場を含みますが、大半は武家屋敷）等で、襲撃してくる相手を阻止しようと、設置された方形の囲いで、藩政期には城の石垣と一体化して、出入り口に設置されるものが主流で、これを櫓形虎口と呼び、城外側と、それに直角に曲がった城内側とにそれぞれ門を設置しました。城外側の門を高麗門（こうらいもん）、城内側の門を渡櫓門（わたりやぐらもん）と呼び、高麗門の先は水堀に架る橋が付くのが一般的でした。これだと、高麗門から進入してきた軍勢を櫓形内で、3方向から監視し、包囲して撃退できるうえ、渡櫓門は高麗門からは、直角に折れた位置になるので、城外からの直撃を避けることにもなり、迎撃態勢は強化されました。江戸城を始め主要な城は、出撃にも考慮して櫓形を設置しています。因みにこの櫓形は藩政期に先行した中世の城で発達したもので、鹿兒島でも、蒲生城、大口城などで城の中核部の周囲に設置されていたことが史料に記載されています。当城では御春屋（おつきや）付近等にも櫓形が置かれていました。

○御樓門の櫓形

御樓門の場合は、櫓形は本丸の出入り口に置かれ、城外側から入ると、城内側では7m以上高い位置で櫓形を出ることになります。しかも櫓形周囲は石垣で囲まれ、強く防衛性を意識し、御樓門で入って、唐御門（からごもん）で櫓形を出るようになっていました（これで本丸曲輪に入り

ます)。御楼門の枳形は、前記した一般的なものと比べると、御楼門は高麗門に、唐御門は渡櫓門に匹敵することになります。が、豪華な御楼門は形態としては渡櫓門に相当し、唐御門は高麗門に相当するので、一般的な枳形での城門配置とは異なっています。そのうえこの枳形は、ひとつの枳形のようなのですが実際は、奥行きと幅各約 20 m の枳形と、奥行き約 20 m、幅約 15 m の枳形との 2 つの枳形を一体化したものです。御楼門は枳形を形成しつつ、本丸という鹿児島城の屋形部の中核的な場所の城外側を向いて築かれていて、周囲からの視線を意識した配置になっていました。

○御楼門の変遷

「見聞秘記」は、慶長 9・1604 年 3 月家久が鹿児島城に移徙（いし、移転のこと）したとしています。1606 年には義弘が家久宛に「鹿児島御内前（みうちまえ）の橋も、6 月 6 日より渡れた」（『鹿児島県史料 旧記雑録後編』史料番号 204、（慶長 11 年）5 月朔日島津惟新書状）と書きました。鹿児島城は「鹿児島御内」とされています。ところで、この御内の語は、元来、鹿児島内城のことでしたが、鹿児島城が築城されて元御内になったと言われているので、この手紙は、1606 年以前に鹿児島城が島津氏の本城となったことを証しています。これらは、既に 1983 年五味克夫氏「鹿児島城の沿革—関係資料の紹介—」で指摘されていますが、その後、気にされていません。鹿児島城は全施設が完成していたわけではありませんが、家久は 1604 年には御内（鹿児島城）で公務を執行し始めていたのです。1606 年には鹿児島湾に面した側の内堀ができ、「御内前」の橋も完成したのです。石垣や門のことは触れられていませんが、藩主である家久が公務をする場で、濠と橋が完成したのに石垣や門がなかったということはありません。この状況は、鹿児島城は完成間近とみるのが実状にふさわしいと思えます。そして 1670 年頃の「寛文絵図」に鹿児島湾に面した側に渡櫓門らしき城門と櫓が、石垣と共にみえています。当初は渡櫓門が企てられ、それが修正されて、1690 年「御楼門普請」となるのではないのでしょうか。初築時は枳形虎口には城外側に渡櫓門があり、1670 年以降に御楼門に変更され、1696 年には御楼門とし結実するという過程が想定されます。

1696 年の元禄大火は御楼門をも焼きました。ひと月後、幕府から修復を許可され木材が用意されました。それでも 1704 年には御楼門等はまだ復旧が続いていて、1707 年に本丸の新作事が済み、御座所が本丸に移されています。こ

れは御楼門も含めてでしょうから、御楼門は焼失から 11 年かけて建て直されたことになります。その後 1810 年 1 月御楼門橋が石橋に変えられ、1844 年 2 月御楼門造替のため囲われ通行止めになり、9 月に大棟に鯨が載ります。御楼門は、再建 137 年後に初めて修理されていますから、建物の根幹はしっかりしたものだと思います。このときの棟札は「天保 15 年（1844 年）9 月竣工 鹿児島府城楼門造替上棟」として黎明館玉里家文書に保存されていると、これも既に 1992 年畠中彬氏が紹介しています。この御楼門が 1873 年に焼失するのです。

○御楼門の役割と性格

御楼門は唐御門と一対となっていて、この近辺に、もしも藩を襲う者がでてくれば、それを制圧し捕縛することは当然の義務（職務）でしたが、藩外の者、城下士以下の身分の者が近づくことはまず不可能で、実際にここを強引に突破しようという者は出ていません。当藩の安全確保はゆるぎないものでしたから、御楼門は、本丸曲輪の出入りを監視して、本丸の安全を確保するとともに、鹿児島藩の封建的な身分制度を目にみえるようにすること、すなわち藩士なかでも城下士に身分格式をしっかりと意識させることが使命となっていました。

島津藩の藩法（『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集 一～五』等）によれば、本丸への出入りの際、將軍、藩主、琉球使節、御一門等大身分（だいしんぶん）の者、上位役職者（家老等）、高僧神官、その客人であり事前に許可された者しか（ちなみに彼らは公的な移動には多数のお供が付くものでした）通過できないと規定し、その実務を御楼門で執行させていました。上記以外の者例えば寄合、小番、小姓與、諸士から、農民、商人職人、家族等は、北御門、矢來門（御馬乗馬場、御茶道通等経由）等からしか本丸には入れませんでした。因みに、この規定通りに運用されたかどうかは、これから検討課題です。

1788 年 6 月の御楼門番所規定（『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集三』史料番号 2642、天明八年六月日表御門番所条目）によれば、門番は 4 人で昼夜勤め、門は朝六ツ（午前 6 時）に開門、夜は暮れ六ツ（午後 6 時）に閉める規定で、閉門時には、鍵は御小姓組御番所に納められ、御門の開閉と出入改めは御小姓組御番人の指図に従って実施されていました。

通過しようとする者のうち、家臣層の場合は、主人名と用件を聞かれ、事前に届け出た書類と合致した者だけ通過できました。不審者や言葉が異なる者すなわち鹿児島弁が



寛文絵図 (新照院口、大手口)

通じない者は、通過させず、夜間は一層厳密に取り締まりました。城近くの火事の際は御番所に連絡し、御門の左右に棒を突き立て出入りを止めました。御楼門とその周囲の掃除は門番の責任でした。

御楼門の番人は、大身分、上位役職者は無論、琉球王子や南泉院や福昌寺の高僧らの乗輿、乗馬での本丸への出入を統制していました。刀剣類は、本丸に入る際、厳重に監視されました。輿に乗った者も乗馬の者も下輿、下乗するのは当たり前なのですが、その場所は御楼門地幅にするのか、御楼門橋涯にするのか微妙な違いがあって、当事者も、御楼門の番人も気を使いました。この御楼門地幅は、橋を渡った御楼門の敷地内で、御楼門橋涯は、橋を渡る手前の下馬所等のことを指しています。実例を挙げれば、1773年8月琉球使節は、御楼門を經由し虎の間の正面から対面所に出仕し藩主重豪に謁見し太刀等を献上しました。その際、王子尚哲は御楼門際で轎を降りましたが、摂政読谷山王子は、橋涯で轎を降りています。微妙な差ですが、当時はかなり大きな差と感じられました。刀剣等携帯品の扱いは身分で大きく違い、それへの対処、下輿、下乗する主人を待つ家来たちへの対応、供をしている家来衆への応接、歩行困難な家老についての優遇等複雑な作業がありました。

大身分「寄合」の嫡男だった名越時敏は、1843年7月12日造替作業中の御楼門に登り（『鹿児島県史料 名越時敏史料四』天保十四年七月十二日条）、同年8月6日宿泊当番だった際、琉球使節歓迎の花火を見ようとして御楼門に登っています（同前八月六日条）。両者は御楼門大改修の間隙を見計らった、大身分の後継者の若き故の冒険談で、内緒話のひと駒です。本来は私的な行動を許されていない場で、目障りにならない遊楽をしたのです。他城では、破天荒な事件も記録されており、鹿児島城本丸で若者が御楼門を適宜利用するのはありうることでしょう。

3 上山城

○上山氏とその屋敷

鹿児島城は、中世に上山氏が築いた上山城を受け継いでいました。まずは上山氏の歴史をたどります。鎌倉後期1317年薩摩国御家人矢上彦五郎が伊敷、田上、上山の領主で、荒田の弁済使等でした（鹿児島県史料 旧記雑録前編一・史料番号1210、薩摩国御家人交名注文）と初めて上山の地名とが登場します。その全体が矢上氏領内のことです。史料に見える地域名から矢上氏は、甲突川の河口付近の兩岸を所領とし、優勢な一族が甲突川右岸、甲突川左岸の東側、西側に割拠し、鎌倉末期にはそれぞれ田上、上山、伊敷と地域名を姓とするようになります。

上山氏は、このように鹿児島湾に近い甲突川河口の左岸付近を領していましたが、河口の砂地は耕地や屋敷には向かない土地で、城山も縁辺部扱で、新照院から草牟田付近を本拠地にしていました。鹿児島市の小字図（『鹿児島市史Ⅲ』（同市1993年刊）付載「冷水町・玉里町・草牟田町・新照院町」）によれば今でも中草牟田の甲突川左岸から5、60m山寄に、屋敷内、内屋敷、屋敷添、下門、外戸口、入船、御舟崎、ジョガ馬場等の小字名があり、大規模な屋敷があったことがうかがわれます。成尾図に「草牟田・稲富氏二往古火立テ番屋ノ跡ト云有リ」とあるのはこの屋敷の存在した時期のことです。

さて上山氏の所領は草牟田、新照院、山下、長田、冷水、紙屋に及び、冷水、下伊敷付近で伊敷氏の所領と接していました。伊敷氏は玉里の伊敷城（しばしば神食城、伴掾館と呼ばれています）を築城しました。これに対し上山氏は、自己の屋敷に隣接し、甲突川を見下ろす草牟田一丁目付近の丘陵部とその周辺に鎌倉幕府崩壊の1333年頃に築城します。これが前期上山城です。

○前期上山城

前期上山城は、今、国道3号線の草牟田橋東側の橋東口交差点の東寄りの小字下門に接していて、ジョガ馬場の東部から南部の小字後ヶ字都、萬助ヶ字都、真迫、北山迫の丘陵部になります。当時の領主は、屋敷に隣接した丘陵部に築城することが多く、上山氏も、今、草牟田、一、二丁目付近の屋敷に接する丘陵を利用しました。そして、小字真迫、北山迫を中核部にし、周辺の城山等を城の縁辺部にしたものでしょう。尤もこの丘陵は、中世後半以降、大規模な寺院の境内になり、新照院の谷から岩崎谷には、大掛かりな土地改編が繰り返され、明治に入って政府の弾薬庫



上山城周辺字絵図

が置かれたりし、広大な墓域が展開し、昭和 50 年代からの団地造成の影響を受け、大々的に地形は変っていて、かつての面影は辿りにくくなっています。

前期上山城が築かれた時期、鹿児島湾西側、甲突川左岸の河口周辺は、稲荷川河口周辺と一体化していて、そこには上山城のほか、当城から北東 3km 程にある東福寺城（浜崎城、梶原城を含む）その西側、当城から北東 2km 程にある尾頸小城、当城から北 4km 程にある催馬楽城等が存在していました。

○ 1340 ～ 41 年とその前後

1336 年京都に足利尊氏が擁立した光明天皇（北朝、武家方）、吉野に後醍醐天皇（南朝、宮方）がそれぞれ朝廷を組織します。南北朝期になると、この甲突川と稲荷川の両河川沿い地域でも、薩摩大隅日向の守護で、出水の木牟礼城を本拠とする島津貞久が武家方となり、守護に対抗する勢力が宮方に通じ、両勢力の衝突が始まります。『鹿児島県史料 旧記雑録前編一』史料番号 2113、梶保末軍忠目安及び、史料番号 2114、禰寝清増軍忠状等によれば、

1340 年、宮方勢の肝付兼重、中村秀純、矢上高純らがいる東福寺城に、武家方の島津貞久の率いた軍勢が 8 月 12 日押し寄せ、攻防が繰り返され、翌 1341 年 4 月 4 日貞久勢が大手城戸口を攻め、同月 26 日に同城を攻略し、同月 28 日には同城の西 200 m 程にある尾頸小城も貞久勢が攻略します。更に貞久勢は、同時期の 1340 年 8 月以降東福寺城から北西 3km 程の催馬楽城にも押し寄せ、散々に合戦し、閏 4 月 16 日に同城を攻略しています。これ以後、東福寺城は木牟礼城、碓山城とともに守護島津氏方に属します。

このように、宮方だった東福寺城、尾頸小城、催馬楽城を攻め取った貞久勢は、同年 1341 年その勢いで、この 3 城の南方に位置した上山氏の上山城をも攻略しました。上山城を奪われることに直面した矢上高純（＝上山左衛門五郎高純）は、前記のように 1340 年、1341 年と催馬楽城に籠城し、貞久に敗れ、貞久に臣従し、上山城に領主としての権益の一部を維持します。

○ 1350 年

その9年後、1350年貞久は、上山城が官方勢によって攻撃されそうだと危惧します。というのは、幕府はこれまでに、日向に守護と別に国大将を派遣し、島津氏ら守護を牽制し、併せて日向国内に設置された足利氏領確保を狙います。そのうえ1345年には日向守護も兼帯させ、独自の軍事組織を編成した国大将は日向・大隅で勢力を拡大し、將軍家御台所領穆佐院、島津院等を押領して、同じく武家方である島津氏や將軍家に対抗します。また幕府では、尊氏側近の高師直と、尊氏弟の直義が抗争し、1350年には観応の擾乱と呼ばれる動乱期になり、幕府が分裂しますし、九州には尊氏庶子で、直義の養子となった直冬が長門探題となって下向し、直義・直冬勢が登場します。1342年から5年間谷山氏に擁護された官方懷良親王の影響や、九州探題今川了俊の存在も南九州に波紋をもたらします。このとき島津貞久は、幕府、九州探題方で、子息の宗久、頼久、師久、氏久らと共に、直義・直冬勢に対抗しています。

この観応の擾乱期の1350年5月23日、島津貞久は、「官方が上山城を攻め取ろうと、昨晚谷峰城に軍勢が出陣した」との情報を受けました。同城を失うと、島津氏は取り返しのつかない事態になると、朝早く自ら同城に向かいます。そして頼りにしていた比志島範平に、一族を率いて直ぐに同城に駆けつけるよう命じます（『鹿児島県史料 旧記雑録前編一』史料番号2320、島津道鑑書状）。上山城には東福寺城から貞久が入城し、更に満家院の比志島範平らに出陣を求めたのです。谷峰城は上山城から、南西2km程、甲突川の右岸、すなわち貞久のいる場所から甲突川を挟んだ、対岸の日枝神社の南西の桃ヶ岡公園付近で、谷山方面から鹿児島目指してやってきた軍勢が、上山城を望める位置でした。この対立は、官方と直冬方が、島津氏に対峙していたため激化していき、3ヶ月後の同年8月21日貞久は、「郡山城が落城し残念である、昨晚も「田上の凶徒」らが大量で攻めてきたが、谷峯城に詰めていた子らが反撃に出て退けました。比志島氏の本城が攻撃されたとしても、維持するようと言っています（『鹿児島県史料 旧記雑録前編一』史料番号2322、島津道鑑書状）。貞久らに対抗したのは田上勢であり、矢上一族の内部抗争になっていました。

○1352年

1352年1月7日にも、当時合戦がひっきりなしで、昨日も「南方凶徒」すなわち官方の数百人が谷山城に集まり、近日中に島津方の城を攻めると思われ、そのとき味方は帰宅して陣は無人で難儀しましたが、直ぐに来てもらいました」と言い（『鹿児島県史料 旧記雑録前編一』史料

番号2392、島津道鑑書状）、合戦を防ぐことができました。この際も上山城は無事でしたが、谷峯城等周辺の城は緊張の連続でした。

この直後、1352年閏2月10日に上山氏の「堂地、居屋敷」を、博多の鞍川後家尼が、向島の横山の上山右衛門五郎宛に譲っています。その堂地居屋敷は東、南は大路を堺とし、西は冷水を限るとあり、山野の堺目には道を造って分かるようにせよ、堂祠の修理は懇ろに行い、毎月18日には講を開き、周囲の者はこれらを妨げてはならないとも書かれています（『鹿児島県史料 旧記雑録前編一』史料番号2395、ひのかわ後家譲状）。冷水を西堺としていますから、上山氏が所持してきた堂地居屋敷は、前記した上山氏の屋敷の一部に相当し、甲突川を望む位置で祠堂等を設置するのにふさわしい場所でした。前期上山城はこの屋敷の南側になることは前記しました。前期上山城は、城山を含みますが、城山の東側は、鹿児島湾に面していて、前期上山城では縁辺部と位置付けされていて、前期上山城の出入り口は、新照院から草牟田側や長田から冷水側を主としていました。この上山氏の後継者は、中世のうちに桜島へ居所を移します。

○1428年の史料

『鹿児島県史料 旧記雑録前編二』史料番号1078、島津忠国置文によれば、1428年2月18日には賢忠寺堺のうち東西の堺は「上山古城」の岸から佐宇津田後北長迫之奥を限り、殺生の制止堺は佐宇津田前から「上山」の尾崎渡端を限っていて、忠国に関連する賢忠寺は上山城に接していましたし、上山城は古城とされるように、過去のものとなっていました。地名佐宇津田は特定できませんが、北山迫が前期上山城に関連する字名ですので、北長迫との類似性が予測されますので、新照院、草牟田あたりと思われます。そして、地域名として上山が使われているので、賢忠寺が前期上山城に深く繋がっていることは疑いありません。

この通り、前期上山城と島津氏との関係は、1341年貞久が攻略したことに始まり、稲荷川沿いの東福寺城が、貞久の子氏久の根城とされ、のちに島津氏の本拠城となるのに対し、甲突川沿いの城として貞久により、戦略的に重視されます。

貞久没後は、前期上山城は1428年、室町期には空き城となり、宝泉山賢忠寺の寺地になったわけです。同寺の詳細は不明ですが、後に谷山中山に曹洞宗福昌寺の末寺、法泉山健忠寺があり（鹿児島市教委『鹿児島市文化財調査報告書（7）鹿児島市寺院跡―近世寺院跡調査報告書』）、何

か関連があるかもしれません。

○1539年の史料

空き城となって187年経過したとき、分家相州伊作家から出て島津本家の家督に就いた貴久が伊集院城を居城として薩摩半島を平定し、1539年3月紫原で薩州家の実久を破り、谷山地域から鹿児島地域を制圧し、戦国島津家当主として、一族や国衆に受け入れられるようになると、伊集院大和守が鹿児島「上之山を取り誘い、自身がここに罷り移り」（『鹿児島県史料 旧記雑録前編二』史料番号2347、樺山玄佐自記）ます。その直後には「桜島の上山、横山、萩原の3人を鹿児島に召し寄せ、大和守に引付け」、桜島を領有し（『鹿児島県史料 旧記雑録前編二』史料番号2348、樺山玄佐自記）、更に「鹿児島麓所々に家臣を移し」、貴久も「伊集院から上ノ山へ御光儀」（『鹿児島県史料 旧記雑録前編二』史料番号2359、樺山玄佐自記）していて、伊集院忠朗、樺山善久の積極的な働きによって、室町期の歴代の家督継承者が無関心だった島津本家の貴久によって、前期上山城として注目されるようになりました。この際、貴久の重臣は上山城を「取り誘う」と記録されています。これは、前期上山城では縁辺部だった新照院口付近を活用することで、上山城を活用しようという気持ちを反映しています。これは上山城にとっては大きな変更です。この時期以降の上山城は後期上山城になります。

○後期上山城

貴久は1550年伊集院から鹿児島内城に本拠を移し、1571年には義久が後継者になります。後期上山城は義久により更に整備されます。1591年8月「上山城の口嶺初川田駿河入道と旧記にあり」（『文政5年鹿児島城絵図』）というのは、島津氏が前期上山城の、草牟田付近から小字の真迫と北山迫の丘陵を重視していたのを、新照院口から岩崎口への空堀を拡充し城山の防衛性を高め、城山の鹿児島湾側の地域を造成できるように整備する転換機が到来したことを意味しています。

ところで前期上山城は、その後中核部を大きく破壊され遺構は全くなってしまい、地名で辿らざるを得ない始末です。そのため、新照院から城山辺が、前期上山城の本体と見做されたり、上山氏の菩提寺上山寺のある新照院の草牟田寄りの斜面が前期上山城の本体と見做されたりしています。また、後期上山城を前期上山城と見做すこともあります。

1822年の『文政5年鹿児島城図』や天保期の鹿児島城を描いた『成尾絵図』（「上山城南泉院上ヨリ島津右衛門

邸上辺マテ御本丸ナリシナランカ、平上柿本寺上辺マテ御曲輪ノ内ナラン」と書いています）は、前期上山城と後期上山城との違いには触れず、上山城といえ、後期上山城のことを述べています。この見方は、藩政末期に城下では広く通用していました。これは中世の史料に出てくる上山城すなわち前期上山城とは全く異なっています。現況から上山城を捉えるのは難しいのです。

4 鹿児島城の築城

○戦国大名期の島津氏

後期上山城を前に戦国大名島津氏は、秀吉大名から、近世大名すなわち島津藩主へと変身します。その時期の島津氏の様子をみることにします。

戦国大名としての島津氏は、1550年に稲荷川沿いに築いた鹿児島内城を本拠城としています。近隣に山城として鹿児島清水城と東福寺城があったのですが、平地に築かれた屋敷城（平城・屋形とも）で狭隘なため籠城には向いていません。そこで1587年秀吉の攻撃を受けた際、日向での第2次高城合戦（根白坂合戦）に敗れると、島津氏はあっさり降伏します。このため秀吉大名になった島津氏は余力を残す結果になり、本貫地である薩摩大隅と日向南部とを保持することができました。とは言え同時に秀吉により、島津氏を混乱させようと、家督にあった義久だけではなく、その弟義弘その子家久等も秀吉の家臣とされ、島津氏は家督の義久以外の義弘、家久の2人が家督を分け合う格好を強要されました。これで義久は大隅富隈城に、義弘は大隅帖佐城に、家久は薩摩鹿児島城に住まわざるを得ない事態となり、島津家家督三人体制（三殿体制）を強いられることとなります。これは島津氏にとっては極めて憂慮される事態でしたが、当の3人は忠良日新斎と貴久の厳しい躰のもとで成育して、長子単独相続制で島津氏の家督を継承する政治観を堅持し、順守し続けましたので、大名として絶える危機を乗り越えます。尤も家臣層はこの秀吉の政策により動揺させられています。

ところで秀吉が没して朝鮮渡海が中止になると、1599年2月義弘の子である家久が、義久から島津氏の家督を相続し、1600年3月には、庄内合戦で勝利を挙げ、前家督の義久らと協調して島津氏の所領の安定的維持のため、籠城できる城の無い危機を克服しようと、島津氏の本拠城を築くことを目指し協議を始めました。このとき、鹿児島城築城に関する最初の史料が作成されます。

○鹿児島城築城に関する義弘の1600年の史料

これは三殿が、合戦に耐えうる城を築くためにおこなった協議を記載したとも言っている、1600年5月25日に義弘から家久に宛てられた手紙です（『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』史料番号1113（慶長五年）五月二十五日、島津惟新書状）。その手紙は、「（家久の使者）本田与兵衛尉」が、支城として吉田、蒲生、帖佐、山田、加治木の5城を備えた帖佐瓜生野城（建昌城）を本拠城にしてはどうかと家久の意向を述べましたが、義弘が城の北側に川があり、地勢的に城に向いていません、そのうえ家臣団や領民のことを考慮すると、築城の原動力となる筈の家臣団は出陣していて余裕がありませんし、百姓は耕作ができなくなりますから無理でしょう。完成には2、3年かかり、当面の要請には対応できませんとしたうえで、次のように言います。島津氏が代々本城を築いてきた鹿児島の地で、東福寺城を補強し、清水川（稲荷川）から東福寺城までを麓にすれば、合戦に耐えうる城になり、多数の家臣等の籠城が可能ですし、現在屋形である鹿児島内城に、石垣と大堀を設ける普請をすれば、本格的な城になるでしょう、そうすれば短期間で済みます、と。しかも義弘は、自説に拘わるのではなく、義久の下知で決めていただきますと結びます。

この手紙の内容によれば、家久からは、当時義弘が居城としていた帖佐城に近い、瓜生野城を島津氏の本城の第1候補にすれば、籠城の課題をクリアーし、義弘が歓迎してくれると思った提案でしたが、義弘は百姓・侍の状況を心配していて、彼らに迷惑にならぬように、島津氏が今の本拠である鹿児島の地を大事にしたいし、現に使っている屋形に、石垣と大堀とを付加すること、決定は自分ではなく義久に委ねることを逆提案しています。従って、この手紙からは、義弘が家久の見解を否定し、義弘の意見に従えと自説を押し売りしたとだけ読むことはできません。そうではなく、義弘は、東福寺城と鹿児島清水城への濃厚な思いと共に、家臣団と百姓に迷惑をかけずに、合戦に耐えうる城を早期に築く方法を述べたことを読み取るべきではないでしょうか。ここで石垣と大堀に言及していますが、天守や御殿や櫓が取り上げられていないことも義弘の思いの特徴としておきます。

このように義弘が、意見の違いを超えて、島津氏首脳陣の意見を集約しようと願い、苦勞していることに目をむきたいのですがどうでしょうか。今までは、家久の意向と義弘の意向の違いを特徴とすることが主題と理解されています。島津氏の中世から近世への歴史を、義久と義弘の兄弟争いとみるのは間違っはてはませんが、鹿児島で一所懸命



寛文期の大手口

に戦い、戦国織豊期を乗り切ってきた家臣団を率いる島津氏の歴史であることに思いを致して、この手紙をみてはどうでしょうか。そうすれば、この手紙を、兄弟の築城に関する見解の相違を確認することで済みますのは、義弘の期待に背くのではないかと思います。

○上山城と周囲の城

既に1600年3月以来本拠城の築城について協議してきた島津氏首脳陣の間では、前記のように5月に家臣団と百姓に迷惑をかけないで鹿児島の地で早期に築城できないかについて意見交換していたのです。すなわち、鹿児島という地域を広くみ直すと、ここには稲荷川筋と甲突川筋とがあり、そこに東福寺城、梶原城、浜崎城、尾頸小城、長谷場城、橋之口城、鹿児島清水城、催馬楽城、鹿児島内城、伊敷城、上山城があります。島津氏が南北朝期以来、領有してきた、甲突川筋の上山城（実は前期上山城）は鎌倉末期に鹿児島地区では島津氏が最初に手に入れた城で、1351年には、鹿児島地区で最も大切な城と位置付け、その城に入り、守りきり、南北朝後期には稲荷川筋の東福寺城とともに、甲突川筋の拠点城とされ、1428年にはその近辺に賢忠寺を置き、佐宇津田前から上山尾崎渡湊までの殺生を禁じてきていました。

戦国期に入って1539年、分家相州伊作家から出て15代となった貴久が同城に伊集院忠朗を城主として配置し、自ら同城に滞在し、その評価を見直そうとします。甲突川筋



元禄期の大手口

の統治のために南北朝期から前期上山城として大切にしてきた城ですが、ここに来て、鹿児島地域で最も時代の要請を受け止められる城として位置付けされ、上山城は島津氏から最高の評価をえて後期上山城となっていきます。1555年には忠朗を鹿児島の地頭とし、義久が1591年川田駿河入道に同城の整備を命じています。この通り後期上山城は、鹿児島の地を構成した多数の城のなかで、甲突川筋の統治のために南北朝期から島津氏領の城として大切にされ、室町期には一時的に空き城になりましたが、戦国、秀吉大名期には甲突川筋にあるが、稲荷川筋と連携を考慮し、合戦向けの城とされ、城下も、今までと比べ三倍以上に拡大でき、菩提寺である福昌寺にも近く、何より家臣団屋敷地は、今までの成果と合わせて使えるうえに、秀吉後をめぐる中央政権構想の動きと鹿児島での島津領国の政権構想の動きと連動して、関が原合戦の直前に、家久により、島津領国の本拠城の主要候補城に選択されるのです。

○関が原合戦直前

後期上山城を含む、関が原合戦直前の島津氏の領国での

動きを義弘に注目しつつみていきます。

1600年8月に入り島津義弘は上京し、19日には家久宛手紙で、出水表は所領防衛の最重要拠点で、出水城の強化こそ肝心であるといい、翌20日には本田正親宛手紙に、出水表は国界であり、在国の入衆に在番を申し付けよと発言します。9月11日には、本田六右衛門尉正親が新納旅庵に、出水は国境であり、在国の人数を召置いても、出水城普請を行うようにと書きます。その内容はいずれも義弘からの提言でした。当時義弘は鹿児島城築城と並行し、肥後界を厳重に警備すること、なかでも出水城を防衛拠点とし、島津氏が普請にかかわることを考えていました。この時期上京していた義弘は、島津氏の所領保全策を相次いで打ち出していて、特に出水城に関心を寄せていたので、一方で家久、義久は当該時点での築城についての文書が残っておらず、その様子は明瞭にならず、取敢えずは、義弘中心で島津氏の動向をみていかざるを得ません。1600年9月から11月の義弘を『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』でみていきます。

○1600年9月から11月の義弘

義弘は反家康方に属し、9月には家康と関が原合戦で対戦し、大阪城で人質となっていた女性たちを救出し、戦場から奇跡的と表現していい離脱に成功します。多くの場合、この期の義弘については関が原合戦での獅子奮迅の働きに焦点を当てますが、実際の義弘は、関が原合戦と同じく領国維持や鹿児島城築城について情報を収集し判断し指示を与えています。9月29日関が原での悪戦苦闘の末に日向の細島に上陸し、10月3日には富隈に着き、義久と会談し、直後に帖佐に戻ります。義弘は戦功大でしたが、義久からは特段に歓迎されていません。

既に黒田孝高が中津城を拠城に豊後を制圧、加藤清正が熊本城を拠城に、小西行長勢の小西美作守が守る宇土城を包囲していたため、美作守が義久に救援を依頼、義久は図書頭忠長とその子忠倍を救援に派遣して清正勢と対決しています。鹿児島周辺は緊張しており、更に伊東勢の稲津祐信が宮崎城を攻略後、穆佐城攻めに着手していたため、上方（関ヶ原東軍）勢の肥後からの島津氏攻めが差し迫っているとみていましたので、島津氏首脳陣の義久、義弘らは所領防衛が喫緊の課題と考えていたので、ですから義弘歓迎どころではなかったのです。

義弘は、同行した家臣への感状の作成に取り組み、それが一段落すると、10月中旬以降再び、危機を乗り切ろうとしていた島津首脳陣の一人として、活動に復帰します。

先ず10月19日本田正親に、出水での辛労を謝したうえ、家久が忠長に出水在番に命じたとし、同27日出水在番の忠長に番衆が主取りできるようにせよと家久に命じ、11月8日には忠長・本田正親宛に、肥後勢が水俣に到着したので、出水口を頼み、外城境を相調えるよう命じました。「忠元譜」によれば、忠元は11月10日加藤勢が芦北入り、伊集院源次郎忠真がその加藤勢に領国絵図や地頭名等を渡し、船手からの攻め込みを策したと報告していました。

11月13日義弘は、家久に高橋勢が穂北城を取囲んだので、佐土原に番衆を入れよと命じ、同日忠長は伊勢貞成に、黒田・加藤・鍋島勢が僅かだが水俣に着いたといい、11月14日には家久に領国の神社の警備、出水に罷り移った者には3石を加増するよう命じ、11月15日には樺山久高に、黒田・加藤勢が水俣に着いたので、堺目の出水は一層堅固に警護せよと命じています。20日には忠長等が「北郷殿に、旧領である庄内300石を知行地として宛行」っていました。義弘は、島津氏首脳陣のひとりとして、所領防衛を優先し、出水を核にした防衛体制の構築を目指して行動していたのです。11月の義弘につき「日々記（『鹿兒島県史料 旧記雑録後編三』巻52, p707～18, 史料番号1409）」でみていきます。

○11月の日々記の義弘

11月2日蒲生に宛て、かつての7月30日御出の際目録で進上した鳥目1貫文を届け、4日出水へ見舞し、6日平佐城に塩硝と硫黄を届け、7日出水へ硫黄を、平佐へ塩硝を届け、8日出水へ使者を送り、平佐へ使者を送りました。9日義弘自ら蒲生城普請を御見舞し、平佐へ使者を送り、11日加久藤に鉄砲等を届け、義弘自ら蒲生城普請を御見舞し、13日出水へ使者を送り、出水から使者が、須木からも使者があり、14日蒲生城へ使者を、出水へも使者を送り、15日蒲生へ使者を送り、16日日向外城へ使者を、加久藤へも使者を送ります。19日出水から使者があり、図書頭殿忠長からも使者があり、黒田如水に返書を書き、彦山の山伏泉蔵坊から振舞があり、加治木から使者があり、21日鹿兒島へいて使者を送り、押川吉蔵を肥後口に送り、東郷衆、菱刈衆が挨拶にきた、22日入来院殿の使者があり、志布志の船頭乗右衛門尉が来ています。23日日向外城と出水へ使者を送り、24日飯野加久藤に使者を送り、浜市へ使者送り、26日北郷、志布志が参上、27日義弘自ら蒲生城普請を御見舞し、30日種子島殿の使者が鉄砲2丁を進上、使者は穆佐に行き、蒲生城普請衆に酒を与えました。

この通り義弘は、10月から11月にかけて肥後勢の薩摩



弘化期の大手口

境への侵攻に神経を尖らせ、出水城を拠点城として、同城とその周辺の城の防衛に目配りしつつ、蒲生、出水、平佐、飯野、加久藤、須木、加治木、菱刈、浜市、入来院、志布志、種子島と連携し、なかでも出水城と蒲生城とは頻繁に連絡を取りあい、蒲生城には普請に際し、自ら御見舞を3回も行い、平佐城、加久藤城、志布志城とも複数回の連絡をしています。所領防衛の面では、義弘は出水城に加え、蒲生城をも重視するようになっていきます。

それらを背景にしつつ、島津氏は関が原合戦の覇者家康との交渉に入っていきます。実は、義弘の帰国以前の9月28日、家康方寺沢広高、山口直友から義久と家久宛に「義弘は義久らの同意を得ていたか」と質問がありました。10月22日には義弘から広高宛に講和を依頼し、10月27日立花宗茂から義久、義弘、家久宛に、秀忠が島津方に対し出陣を準備しているので、島津方から使者を送り詫びるよう連絡があり、12月29日には、義弘の関が原合戦に従事し、京の鞍馬で捕虜となっていた本田助丞が家康の指示で帰国してきました。この頃家康は、將軍就任を目指し、義久の



安政6年絵図（1859年）大手口，新照院口



安政6年の大手口

上京を強く要望し焦っていました。これには家久が反対していて、1601年1月16日鎌田政近に書いた手紙で、義久上京を受け入れないと島津氏は断絶されると心配しつつ、戦うしかないと決意を述べていました。島津氏首脳陣は家康と戦って敗れる危機を覚悟しつつも、義久の上京を認めなかったのです。この方針は島津氏首脳陣が譲れないもので、上方勢（含肥後勢等）の攻撃を覚悟して、境目に加え所領内の主な本城の防備を固めていた程でした。これ以降島津首脳陣は、最終的には家康の妥協を勝ち取る展望のも

と、家康勢との交渉を続けようとしています。そのためか1600年5月25日以降、島津首脳陣の間で鹿児島城築城についての目立った動きはみられなくなります。一方で家久は、鹿児島城築城の策を着実に練りあげています。それを見ていきましょう。

○「御日記」による1600年12月から翌1601年1月までの家久

御日記（『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』巻53, p730～40, 史料番号1440, 上井経兼日記）は1600年12月から翌1601年1月までの家久の動向を示しています。そこで鹿児島内城での公務とそのなかでの鹿児島城築城を主にして、原文をできるだけ活かすことで当時の雰囲気を味わえるようにしてみます。以下は、1600年12月から翌1601年1月までの家久の動向です。

家久は、12月28日三ヶ寺（福昌寺、大乘院、浄光明寺）挨拶、29日京より家康御内の伊井家、山口家の両使者が下向、合わせて、前記の通り島津氏御内衆の頼娃・白濱その他の本田助丞等侍の多くが鹿児島に帰着、京の使者は綾の里で越年しました。1601年1月1日小板屋に御出、冠装束で御対面所、その後広間に御出、町田・村田・上井・本田各氏と諸侍が伺候、その後五社参りがあり、御一家諸侍残らず御供、奥の御対面所で老中が三献、鹿児島諸侍も続、2日雪、小板屋、対面所で式三献、福昌寺に御光儀、町別当が定舞台で御目見得、奥で御節供の三献、地頭には御かわらけが下されています。昔は長命と言う猿樂が罷り出て音曲になったと書かれています。3日頼娃氏らが三献、義弘の使者が刀を進め、弓初め三献、京よりの般若院・本田・伊勢・田辺屋道与ら三献、その後旧例で指宿から調進があり、地頭鎌田が三献の御かわらけ、以後諸侍酒を給、唄初めもあり、年男が三献、同朋も同座、旧例で市来の御雑飼・義弘様の御使者・百次・隈之城・山田の挨拶を受け、4日談義所、対面所で諏訪の座主・衆徒・内侍が御目見得、その後福昌寺に御成、平家が一筋を申ました。御帰駕を待つて御百姓衆・職人が庭上で御見得、伊集院が定舞台で御見得、山伏衆・向島・伊集院源二郎等が出仕、5日福昌寺・南林寺・興国寺・御馬乗初め、6日時宗衆、義久様の御使者三献、南林寺御光儀、7日諸侍ことごとく出て御対面所の儀、近衛殿より御書、帖佐・加世田金泉寺・日新寺が挨拶、鉄砲揃え、弓揃え、乗馬具揃えがあり、酒宴には庭での慶祝い言がありました。8日、広濟寺・伊集院・伊作の源太夫・大汝八幡が挨拶・図書頭・秋月が年頭挨拶、9日吉利氏・新納・町田その他寺院が挨拶、10日又吉氏・

太平寺・山内寺が挨拶, 11 日御祈祷初, 南殿之間で大般若, 談儀所で御吉書, 御鎧祝初, 川辺神殿寺が挨拶, 弓揃えがあり, 12 日右馬頭・村田・佐多・亀山・片浦の仮屋が挨拶, 富隈に御出, 好天で舟を使い, 義久様と御寄合, 13 日富隈で佐土原・敷根・京使者和久・球磨が挨拶, 帖佐で義弘様に会釈, 14 日帖佐泊, 15 日午刻鹿兒島へ諸侍御供で戻り, 16 日千句連歌がありました。

17 日阿多大年寺・一乗院・坊之津仮屋・同町人・山川仮屋・日向八代仮屋いずれも白麻進上, 定舞台にて御目見得, 伊作初狩で穴六匹進上, 山野初狩で猪一匹進上, 上山城(鹿兒島城のことです, 以下史料通り上山とする)へ御出駕, 諸侍屋敷を御覧し遠矢, 祈祷護摩初め大乘院・安養院諸能化参る, 18 日東霧島・伊勢・山田民部・念仏寺・高城・松岡・伊作金蔵院が樽肴進上, 御酒賜る, 田布施初狩進上, 平田館御光儀し詩歌に興, 上山御普請初, 21 日志布志大慈寺挨拶, 義久様から手紙, 22 日図書頭殿館御光儀, 23 日北郷・平賀・本田・法花嶽寺挨拶, 24 日御祈祷, 御護摩, 老中乱舞, 御簾中より祈祷, 25 日御談合, 午前御普請場に御出駕, 家久は大雨に濡れました, これは三略の「雨不張蓋」通りで神妙でした, これで普請は大いにはかどりました, 26 日霧島座主等や米良使者, 富隈から両使者, 義久様への使者があり, この日は使者が出入りしています, 申刻御普請場に御出駕, 27 日大雨, 宮内社家衆が古態三献, 28 日圓乗坊・帖佐新納挨拶, 巳刻御普請場に御出駕, 酉刻御普請場に御出駕, 上山にて遠矢, 29 日, 川上三河入道が小板屋に, 午刻御普請場に御出駕, 義弘様を船本まで迎えたが日が悪く屋形には出られず, 30 日一乗院・佐多殿, 義久様光儀, 御対面所で三献, 森祈祷が成就しました。

この通り, 家久は藩主として 1600 年末から 1601 年 1 月にかけて, 儀式・行事に携わり, 各分野の人物から挨拶を受け, 御成・御出・御光儀・御出駕と自らも活発に行動していました, そのなかで 1601 年 1 月 17 日～29 日の間に, 鹿兒島城(上山城)築城の準備をしたのです。

○御日記による鹿兒島城築城

御日記の鹿兒島城(上山城)の築城を整理します, 御日記の家久の行動は複雑多岐にわたりましたので築城についてまとめます。

まず, 初日と最終日に「遠矢」儀礼がありました, 初遠矢の翌日, 普請初めがあり, 以後家久は 5 回普請場に行き, 2 度目の遠矢の翌日でそれが終わります, この普請場行きの行事のみ時刻が記されていて, 他の儀礼・行事とは大いに

違い, 丁寧な記載となっていて, 重要視されていたことが窺えます, 13 日間にわたった儀式で, 1601 年 1 月 18 日には普請が始まりました, 普請初めから 7 日後は降雨でしたが, その雨のなか家久は, 傘を差さずに現場に滞留しました, これは中国の古典に出てくる奇瑞にあやかりとしたものです, この儀式には家久のみが出席し, 義久と義弘とは参加しておらず, 家久が一連の築城儀礼を主導したことが明瞭に表れています。

併せて, この時期の家久の立場から義久, 義弘との関連についてみていきます, 家久の正月儀礼には義弘が 3 日に, 義久が 6 日に使者を送っています, 上山城(前記の通り鹿兒島城のことです)の儀礼の開始の 4 日前に義久屋形に行き寄合し, 同所に泊まり, 3 日前には義弘の形に行き, 義弘に会釈し, 同所に泊まっています, 上山城での儀式の日に義弘が鹿兒島内城に来ており, 翌日には義久が鹿兒島内城に来ました, 義久, 義弘は同日にならぬよう配慮されていて, 別々に家久と連絡を取っている様にみえます, 上山城の儀式では, 最初の遠矢と, 終りの遠矢にかかわって訪問したりされたりしています, 家久は, 義久と義弘と同等に繋がりを持っていたことを示しています, とはいえ義弘が鹿兒島に来たのに日柄が悪いと面会を避けています, これに対し義久は家久に面会していて大きな違いを感じます, なお上山城関連行事には, 相州伊作家の所領地に関係すると思われる初狩行事が伴っていることも読み取れます。

次は, 1602 年 2 月以降の島津氏首脳陣と城について『鹿兒島県史料 旧記雑録後編三』でみていきます。

○1602 年 2 月以降

この時期になりますと, 島津氏首脳陣は, 義久の上洛問題に強く関心を寄せています, そして結局は義久に替って家久が上洛することになり, 1602 年 8 月に鹿兒島を出て, 12 月 28 日に伏見城で家康にお礼し, 1603 年 2 月に所領を安堵され帰国します, この安堵について島津氏は, 家康に安堵させたと認識していたとみえますが, 実態は, この安堵で島津氏の家康との関係は, 將軍と大名との関係となり, 封建的な主従関係が確立したのです, これで家康の意向に沿う限り, 藩主の地位を安定して継続できるようになりました, この 1601 年 2 月以降, 1603 年 2 月の間は, 島津首脳陣からは, 島津氏の藩主としての地位を確定する最終過程だったわけです, そこでこの間の, 島津氏首脳陣と所領内の城とのかかわりを, 史料でみていきます, 先ず 1602 年 2 月 8 日図書頭忠長が鎌田出雲守政近と平田太郎



御城山総絵図

左衛門増宗宛に、このたびの合戦の際、祁答院城の宮之城は明城だったので妻子を招き置き在番したと書き、7月16日に義弘が家久に鹿児島城（上山城）の普請を見聞した旨を書き、8月3日家久が本田正親宛に堺目の普請を入念にと書き、8月26日義弘は肥後勢が芦北に着いたと家久に書き、本田に「矢入れ之祈念」を申付け、一昨日までは出水への打立はないとし、11月11日伊勢貞成が、平佐城普請は御蔵から兵糧を出すと掟書しました。このように、島津氏首脳陣が所領内の城とかかわった記録は1602年2月

～11月には5件です。これは、1600年の所領内の各地の城との目まぐるしい連絡や交渉振り、1601年1月の「御日記」にみられ家久の場合とは異なり、島津氏首脳陣の所領内の城とかかわりは、激減しています。とは言え、肥後勢による島津氏の所領への攻撃に対しては、常時神経を使い続けていて、出水城と比べれば、鹿児島に遥かに近い平佐城での普請が取り沙汰されています。所領内の諸城とのかかわりは減っても、島津氏首脳陣は、所領内の城を補強して肥後等周囲地域からの攻撃に対し、厳重に備える体制

は緩めなかったのです。このとき、義弘の鹿児島城築城に関する二番目の史料と思われる手紙が作成されます。それは、1602年7月16日に義弘から家久に宛てられた手紙です。これは、島津氏首脳陣が京勢や肥後勢等との交渉に明け暮れているなかでの鹿児島城築城に関わる協議の様子を記載したものです。

島津氏首脳陣は、1601年1月以来、上山城と称して鹿児島城築城に着手していたと述べてきました。その城の構想、構成、特徴、性格についての史料は決して多くはありません。そこで、鹿児島城築城以前の1600年5月23日の義弘の手紙を、鹿児島城築城に関わる最初の史料として取りあげました。それに継いで、鹿児島城築城に関する二番目の史料が作成されます。

○鹿児島城築城に関する義弘の1602年の史料

これは鹿児島で既に1年半前に着手された合戦に耐えうる鹿児島城の築城を承認する協議を記載したと見做せる、1602年7月16日に義弘から家久に宛てられた手紙です（『鹿児島県史料 旧記雑録後編三史料番号1660、島津惟新書状』）。その内容は、築城の普請場に行った義弘が、築城そのものと、築城を変更する手続きとに関し気になる点を書いたものです。それによれば上山城跡をもとに築城されつつある鹿児島城（史料では一貫して上山城と記載されています）は、全力で取り組んでも直ぐには十分な成果にはならないと思いますと書き始め、その理由を、家臣（侍）たちは、自分の屋敷造りに追われていて、城（藩の施設）の建設には協力する余裕がなく、屋形はこれまでのものを移すばかりで見かけが良くない、また鹿児島城に侍たちが一斉に移転するのは難しいことだと難点を指摘します。そして侍屋敷は海に近く、近年根占の兵船に現在の屋形が攻撃されたように危険です。義弘はと言えば、鹿児島城ではなく鹿児島清水城に移れば問題ないし、義弘も鹿児島城に移るより鹿児島清水城に移る方がずっといいと思いますと記しています。今、作業を止めたくはないと思う者がいるかもしれませんが、今までも普請の出来が悪くて中断した事例はいくつもあります。家臣のなかには、城の周囲に屋敷を造りつつある者や、完成した者もいるでしょうが、そういうことがあっても遠慮なくていいでしょう。とは言え鹿児島城（上山城）を廃城にすべしとは思っていません。当面は鹿児島城を出城（支城）にしておいて、完成次第、侍を少しづつ移動させればいいのです。取敢えずは鹿児島清水城を屋形にし、東福寺城を挾城にしてはどうでしょうか。義弘と打ち合わせし、義弘の指示で鹿児島城（上

山城）への移動を止めるのもいいでしょう。そうでなく家久の判断で鹿児島清水城に移るとしてもいいでしょう。以上は出過ぎた意見で聞こえが悪いというのであればこの件はなかったことにし、賛否を各所の人物に問い、それを尊重して決断してくださいと結びます。

義弘の手紙は、城自体のこととしては、新しい屋形は、鹿児島内城の屋形が移されるので、見かけがよくないと述べています。鹿児島内城の建造物の再利用を批判しているのです。当時の築城では、以前の施設の資材を再利用ができるならば再利用するのが当たり前でした。当城も、以前の城が続いていましたから、以前の資材を利用して建設され部分が多かったと思います。資材の再利用に代わる案はなく、再利用をしないと新規の創作になり、資材、経費、時間ともに余計に掛ることになります。この様子とこれ以外に石垣・堀・建物については触れてもならず、鹿児島城を中止することはまったく考えていませんという言葉からみると、義弘が築城自体に反対しているのではないことは明白です。それに対し、築城によって生じる、家臣団の建物である「諸侍屋敷」には問題があるといい、その工事の修正のための幾通りか提案があります。この部分が手紙の後半部の大半を占めています。ということで、この手紙は、建造物に関わるのではなく、家臣団の屋敷に関わることを主に気にしたものです。

主に侍屋敷とそこに転居する侍の困難さを指摘し、転居を無理に急がなくていいという文脈が展開されています。従って義弘は、字面（じづら）からは、鹿児島城の建設を否定する主張にみえますが、実際は鹿児島城を認め、鹿児島城の普請も容認し、更に同城周辺に家臣団の屋敷をできるだけスムーズに建設したい、すなわち城下も早期に完成させたいとの思いが見て取れると思います。

普請に当たっている者とは、接点を失わずに、築城問題を決着させようとしているのです。この手紙からは（すでに取りあげた、1600年5月25日義弘の手紙と同様）、義弘と家久の意向が相違しているところをみて、両者の対立が鮮明になっていると見るようであれば、義弘の真意を見損なうことになります。そうではなく、義弘は、東福寺城と鹿児島清水城への熱烈な思いと共に、家臣団には負担をかけずに、鹿児島城周辺に屋敷を早期に建設できるようにと述べたことを読み取ることができるのではないのでしょうか。そして前記したように、この手紙を、意見の違いを認めつつ、島津氏首脳陣の意見を集約しようと尽力していることに焦点を当てたいと思います。今までの、島津氏の中

世から近世への歴史を、義久と義弘の兄弟争いとみるばかりでなく、厳しい現実を乗り越えて近世大名への道を歩み始めた島津氏の歴史に照らして、この手紙をみてはどうでしょうか。この手紙を、兄弟間の見解の相違を探ることで済ましては、義弘の真意を見損なうと思えてなりません。結論としては、この手紙は義弘が東福寺城と鹿児島清水城に深い愛着を持っていることを印象付けながら、新規の本拠城を家臣団の支持を得て、鹿児島で早期に築城させようと島津氏首脳陣が合意に達したことを記録したものとみるのがいいと思います。

因みに両手紙によれば、島津氏首脳陣が、鹿児島の地については稲荷川筋に限定する立場と、稲荷川筋と甲突川筋を含む立場とがあったこと、前回は諸侍・百姓が迷惑としたが、今回は諸侍が一度に転居できないと指摘したこと、前回は御座所、屋形を取りあげたが、今回は諸侍屋敷、諸侍之家居を強調し、前回は最後には義久の下知次第としましたが、今回は功者の人々の多数の意見を尊重している等、時の流れと周囲への細かい配慮があります。

また家久は、築城に着手して1年以上、家康に対抗する姿勢を崩さず、防衛面を強化し、更に義弘が諸侍、百姓の負担増を心配していたことに配慮し、旧来からの城を引き継ぐのが主で、新規に築くのではないと主張して、この鹿児島城築城を上山城の名称（勿論後期上山城の跡）を使いつつ実施し、実は山城の防衛機能を高め、麓に屋形を増設しています。増設部分は大層な費用がかかりますが、義弘、義久にはあくまで上山城の改修と説明しています。従って、諸条件が変わってからは、鹿児島城と呼べるかもしれないが、当分の間は、上山城と称していくことになりました。

5 おわりに

築城時直後は、全体を上山城と呼んでいましたが、家久が家康に従うと直ぐに島津氏の本城として江戸幕府に承認されます。当時幕府は、本城を地域名で呼びましたので、鹿児島城という名称になりました。

その鹿児島城は、後期上山城をもとに、合戦への備えを優先して構想され、実際には所領経営の拠点としての役割に大きく配慮し、屋形を麓に創設していきました。そのため、鹿児島城の変遷や構成を検討するには、山城部と屋形部とで鹿児島城ができていることを念頭に置いておくのが肝心です。

山城部には、南北朝期に島津5代貞久が依拠した前期上山城があり、30年程前16代（前家督）義久が改修した後

期上山城の曲輪等が存在しており、18代家久はそれを継承しました。麓の東側の屋形は、先ず、山城の裾を外堀で囲み、その中央に内堀と石垣で囲まれた中核部を造り、居所と呼び、その隣接地に中核部に準じた敷地を置き、周辺部に有力家臣の屋敷等の建物群、諸施設を造っていき、時代と共に、一部は鹿児島湾を埋め立てる等城域を拡大していきました。

城の出入口は、山城の曲輪に通じる3~4カ所を設定します。鹿児島湾に面した場所を正面とし、その麓に置いた門を大手口と言い、麓の北東にあるのが岩崎口、ほぼ真北、野首地形を強調し北側への備えとした場所に置かれたのが新照院口でした。

一方、屋形の出入口は南の外堀に見立てて流れを一筋にした甲突川に架けた西田橋に通じる地点、今の中央公園の南端、照国町交差点に櫓形口を設け、北の外堀の吉野に向かう地点に新橋口を設けました。この屋形の中核部は前記の通り、内堀に囲まれており、その正面の出入口に設けられたのが御楼門でした。この通り、御楼門は屋形の中核部の表側に造られたのでした。

この鹿児島城は、島津氏の総意のもと家久は、屋形の南側端になる、山城に通じる入口を重視し、鹿児島城全体の手口のとしました。そのため、既に述べたことですが、屋形が鹿児島城の主要部分となり、その正門である御楼門が大手門の役割を果たすようになって、大手門は昔から別に存在しているということを尊重していて、伝統となり、御楼門は大手門と呼ばれることはありませんでした。

また御楼門は、上層の周囲に縁を回す、大寺社の楼門の形式を援用しつつも、2階の周囲を海鼠瓦と漆喰で固め戦国の城の性格をもちつつ、国持大名で、長い歴史のある武家の名門の威厳を備えることになりました。

家久は当初、山城を重視し、その曲輪を後に本丸、二之丸とし、屋形を居宅と称しました。家久が築城期に抱いていた危機感や長きにわたる守護大名としての誇りはその後も引き継がれ、実際には屋形を使いつつ、山城の曲輪には、家久と親しい島津日置家の常久を、1612年その番所に入れ、城中警固を命じましたし、その後も鹿児島城は山城と公称し続けていました。蘭癖大名重豪のとき、屋形の御下屋敷を二之丸とし、その後、当主のいた屋形の中心となる曲輪を本丸と呼ぶことにしました。

かくして島津氏は、江戸期的大名として唯一人、守護としての管国を引き続き所領として、生き残り、本城の本丸に天守を設けず、山城への登城路を大手口と称し続け、犬

追物等鎌倉幕府期以来盛んになった武芸を重視し、江戸幕府で特段に重要視された能楽を盛んにし、中世以来の薩摩大隅日向の本貫地を維持し、膨大な家臣団を兵農分離に逆らって武士身分として存続させ、郷を長らく外城と呼び、琉球口と呼ばれるアジアとの繋がりを持ち続ける等々極めて個性的で、魅力あふれる城造りをし、独自に、大名の地位を維持してきたのです。この歴史は今でも、十分に理解されていません。

その後、肥後勢の攻撃の危惧が解消するのに対応して山城は軽視され始めます。それでも島津氏は、1696年の幕府への報告で山城に本丸、二之丸があり、屋形は藩主の居所であると強く主張し（鹿児島城絵図）、1713年の絵図には山城は省かれましたが（正徳3年御城下絵図）、1756年幕府国目付に対しては「鹿児島城は山城である、但し本丸、二之丸には櫓、堀、堀はありません」と説明してきたのです（『通昭録』）。なお番所跡の土屋敷に関連し、1859年安政城下絵図（旧薩藩御城下絵図）に城下土屋敷が4筆と南泉院借地等2筆の住人の存在がみえ（『鹿児島城下絵図散歩』、1842年の住人も記載）、山城部に幕末期に居住した人物がいました。この詳細は不詳ですが、今後史料が出てくることを期待しています。このように、鹿児島城山城部について言うと、1601～14年には島津氏により強化され、それ後は軽視される傾向になり、1713年以降はその傾向に拍車がかかったにもかかわらず、1756年になっても、山城に本丸、二之丸があると説明しています。その本丸、二之丸については、重豪の頃からは、本丸、二之丸の名称は屋形の名称になり、山城の呼称は消えていきました。そのなかでも山城に通じた大手口については、鹿児島城大手であるという説明を廃城に至るまで持続しています。島津氏が大手門（大手口）を、山城への出入り口との名称として使い続けたのは、施設も継続させ、番人も配置し続けていたからではありますが、山城には曲輪も無くなり、利用者も多くはなかったのに、築城時の役割に敬意を払い続けたのです。藩主島津氏を先頭に山城部に敬意を払う姿勢は伝統となっていき、島津氏が藩主を降りても継続され、今に至るまで、大手口、新照院口、岩崎口のなかに根付いています。

なお、鹿児島城の山城としての上山城の範囲は現在では、城山公園駐車場、ドン広場、城山展望台、城山ホテル鹿児島等を含んでいて、中世の上山城の範囲を反映しています。また、上山城が、鹿児島城跡（鹿児島城の山城跡）ですという認識は、若干軽んじられていた時期があります。また、



開門直後の御楼門（国道側より）

廃城後に、鹿児島城山城部の二之丸はドン広場と説明されてきましたが、山城部の本丸、二之丸の場所の特定は、絵図史料等にみられる本丸・二ノ丸の施設跡、濠・道路・門跡、犬追物跡等と共に、最近始まったばかりです。

ドン広場は、西南戦争時に政府軍により大規模な改修を受けたことが想定されています。また1907年皇太子時代の大正天皇が鹿児島城に登城するため、大手口から通路が確保され、城山展望台が造成されたのですが、その詳細も分かっていません。現場はかなり残存しているとみられるので、調査研究が待たれる状況です。

また上山城に付加されるという形態で成立した鹿児島城屋形部も、現代の人々の生活を豊かにするために供され歴史の遺構として尊重されているとは言えない範囲も見られます。それはともかくとしても、鹿児島城域でありながら、現地に鹿児島城内であることを示す説明板等は殆どなく、一般住民の方々も、鹿児島城屋形部の住民の方々も、鹿児島城屋形部であると周知されていないことが気になる時期が続きました。

そんななかで鹿児島市建設局は、2008年に施行された鹿児島市景観計画に沿って、城山展望台を視点場とし、桜島眺望確保の範囲を定め、鹿児島の個性ある景観形成に取り組み、1987年以降国道10号線の館の馬場で、電線類地中化工事（これは国の事業）や歩道石張り、74灯のガス灯と街路樹植栽等を実施し、1991年に「城山周辺地区景観風致保全指導要綱」の制定などの実績のうえに、2019年に「歴史と文化の道地区」を景観計画区域とし西郷銅像、御楼門、石垣を展望する眺望地点3ヶ所と、地区全域を眺望する準眺望地点1ヶ所を設定し、良好な景観づくりを進めています。これは大いに歓迎されています。

また鹿児島県立図書館や黎明館等は、鹿児島城屋形部であった史実を活かした鹿児島城の説明版を設置し、城山ホテルも鹿児島城内であることを明確にするよう活動をはじ

めました。関係機関の方々に感謝します。

これから鹿児島城山城部、屋形部や鹿児島城全域が精査され、常設の研究施設が活動を始め、その成果が前記諸活動の充実に繋がれば、山城部、屋形部ともに魅力あふれる実像を確立できると思います。そうなれば復元された御楼門は、ますますその真価を発揮するに違いありません。

付言

本稿中で触れた鹿児島城の絵図は、既にミュージアム調査研究報告No.11, No.13, No.14, No.15, No.16, No.17で何回も引用し、鹿児島県立図書館貴重資料紹介展の説明書『鹿児島城再発見』（同館 2020 年刊）、2020.9.30～11.3 黎明館企画特別展の『鹿児島の城館 図録』で詳しく触れてきたおなじみの図ですので、通称に従い使用しました。理解しにくいと感じられました方には申しわけありませんが、諸般の事情もありこのような仕儀となったことをご理解いただきたいと思います。

その絵図のなかで唯一の例外は、すなわち初顔は、鹿児島城の山城部の幕末明治初期の様子を伝える『御城山総絵図』です。これは東京大学史料編纂所が所蔵する島津家文書に含まれているもので、『天然記念物及び史跡城山保存活用計画』（鹿児島市 2020 年刊）で全体図が紹介されています。鹿児島城山城部の大部分を含む朱引図でして、山城部内に平坦な面が4ヵ所明確に示されていて、文政5年鹿児島城絵図と類似の城道記載がありますので、鹿児島城そして御楼門理解に役に立つ絵図です。

本稿は、御楼門を含む鹿児島城に親近感を持っていたいただき、興味を感じていただきたいので、鹿児島城三口番所の変遷と山城本丸曲輪関連の屋敷の部分図を、本稿の内容にこだわらず挿絵風味で7点掲載しています。特に本丸の変遷をたどるのは楽しいテーマになると思っています。本稿に続いて展開しようと思っている「鹿児島城の御楼門と大手門」の理解にも参考にしていきたいと願っています。鹿児島城と御楼門の、永続的、組織的調査研究にお役に立てば、これに勝る喜びはありません。（2021年2月記）